

「そばにいて育つ」

— お茶大附属『幼保』のかかわり —

お茶の水女子大学ECCCELL 第四回保育フォーラムから

私市和子(保育士)
宮里暁美(大学教員)
浜口順子(大学教員)

お山の上



いずみ
ナーサリー

お茶の水女子大学
キャンパスには、二
つの幼児施設、附属
幼稚園(3〜5歳児)
といずみナーサリー
(0〜2歳児。大学
教職員と学生のため
の認可外施設。定員
は25名程度)が、「そ
ばに」建ち(上図)、
双方の子どもたち

は、生活のいろいろな場面で出会ってはかかわり合
いをもちます。

二〇一四年三月、私たちは、両園の生活の交差部分
の意味を問うフォーラムを行いました。さまざま
形の幼保一体化が進む中で、乳児と幼児が出会うこ
との原点を問い直したいと考えたからです。幼稚園
の庭の、木々の生い茂る丘の斜面を上ると「お山の
上」と呼ばれる原っぱがあります。その右手奥に、
ナーサリーは「離れ」のようにひっそりとあります。
そばで育ち合う関係について、ナーサリー、幼稚
園それぞれの視点から語っていただきました。

附属幼稚園

◆ナーサリーから◆

園児との自然なかかわり

幼稚園児とナーサリーの子どもたちのかかわりを幾つかの事例でお話しします。

幼稚園からナーサリーにつながる出入り口の扉をたたいて園児が訪ねてきます。「虫を見せてあげる」と虫かごを持ってきたり、「一緒に遊ぼう」と誘いにきたり、芋掘りの後には大きなさつま芋を抱えて「食べて！」とおすそ分けに来てくれます。春には保育士の後ろに隠れていた子どもたちですが、扉での出会いを重ねるうちに、「なに？」という顔で園児を迎えるようになりました。

六月には年長児が、じゃがいもパーティーのお誘いに来ます。子どもたちは、いつもと違う場である幼稚園の園舎に入ると少し緊張します。テーブルに着くと、じゃがいもの皮をむく、麦茶を注ぐなどの年長児のおもてなしが始まり、お芋を口に入れると子どもたちの緊張がほぐれました。皮をむく姿をじっと見て、苦手なお芋を一口食べる子もいます。

このじゃがいもパーティーをきっかけに園児と子どもたちの距離は近くなるように思います。

お山での偶然の出会い

ナーサリーから扉を出ると、高い土山があり、ここで子どもたちのさまざまなかかわりが見られます。土山をいとも簡単に上る園児は、あこがれの存在です。あこがれの気持ちは、同じようにやってみてみたいという願いとなり、園児に手伝ってもらい頂上に立った子どもたちの喜び。そして共に喜んでくれた園児は、『今度は一人で上りたい』という小さい人の思いを受けとめ、手を出さずに見守ってくれました。山の上に挑んできた子どもたち。冬になると、立ったまま上れるようになりました。二歳児が土山を見上げると、頂上にいた園児に「チビは上ってくるな」と言われました。すると、『こんなことだってできる』とばかりに立って上り、保育者のもとで「チビじゃないよ」と小声で言い返しました。

別の日、同じ二歳児が他の園児に「手伝ってあげる」と優しく手を差し出されると、『一人で上れる』

という気持ちを抑えて、手を取って一緒に上りました。悔しい思いは強さになり、優しさを受けると優しさが生まれます。お山に心もからだも育まれているようです。

ある日、子どもたちが、丸太の家の屋根から跳び下りる園児を見上げています。高い場所から跳ぶ姿に驚き、園児は誇らしげに跳ぶことを繰り返します。保育者が「かっこいいけど、けがするとナーサリーの子が悲しいよ」と話しました。少し考え、「そうか、心配するね」と言い、はにかんだ表情で跳ぶことをやめました。『自分を心配する小さな存在』に出会ったようです。その直後、二歳児が同じ丸太の家の低い場から跳んでいました。

園児が片付けをした後にナーサリーの子どもたちが遊びます。そこには園児の遊んだ跡が残されています。お山を滑った段ボール、落ち葉のプール、滑らかな泥んこなど。これを使って園児の遊びをまねしたり、別の遊びを創り出したり、人と人のつながりだけでなく遊びもつながっているようです。

それぞれの舌舌を大事にし、偶然の出会いからあ

こがれ、受容、時には思いがすれ違うこともありませんが、子どもたちの豊かな遊びと緩やかで自然なかかわりを積み重ねていきたいと思います。

(私市)

◆幼稚園から◆

「そばにいる」関係の中の私たち

「そばにいる」という言葉が醸し出す温かな雰囲気を感じながら、ナーサリーの子どもたちと幼稚園児、保育者たちのかかわりの実際についてお話しします。

かかわりの中で大事にしたことは、

○子どもの思いから出発する

○子どもの動きに応える

○大人たちは連絡を取り合う



▲じゃがいもパーティーで

○相手の都合を考える

の四つでした。また、自然なかかわりを積み重ねるとともに、合同の研究会を行い、かかわりの意味について確かめました。

ある日の研究会で、「ナーサリーの子が土山を上っていると、幼稚園児が助けようとして手を伸ばす。中には自分で上れる子もいるけれど、伸ばされた園児の手を握って上っている」というエピソードが話題になりました。ナーサリーの子の心の中に、園児の優しい気持ちを受けとめようという、思いやりとでもいうものがあるのではないか。かかわりは互いの思いが重なることで成り立っているということを確認しました。

このようにして語り合ったことが、保育者同士の心に残り、次の出会いの時の「心の構え」（子どもへ向けるまなざしの深さ）につながっていったように思います。

幼稚園の園児たちにとって、ナーサリーは特別な場所でした。「行きたい」という気持ちを持ち、園児たちは扉をノックします。ナーサリーで過ごす中

で園児たちが感じていること、体験していることについて考えてみました。

かかわりを重ねた三月初旬の記録です。

① 駆けださないではいられない気持ち 「久しぶりに遊びに行ける」。喜びに包まれた年長児三名は、ナーサリーと幼稚園をつなぐ階段を駆け上がっていく。

② 会ったら伝えたいことがある 「この子、新しく入ったんだよ」と園児に伝えているナーサリーの子がいた。

③ 思いが言葉になる 散歩の準備をしているのを見て、「お山の上で十分じゃない？」とナーサリーの主任保育士に話す園児。大人のような顔で。

④ 見送る―見送られる関係 散歩に出かける子どもたちを見送る園児。ナーサリーに対する愛着がいっそう増したように思われる。

⑤ 情報を得る、語り合う 「これこれ」「これ見なきゃ」と言って掲示写真を見始めた園児たち。相手への興味があるからこそその行動。

⑥ほっとする雰囲気 赤ちゃんたちがいるナーサリー。ものと人、ものに込められた時間や思いが、温かさを醸し出し、それを感じている。

ナーサリーで過ごした三十分ほどの中で園児たちが感じたことをまとめてみました。子ども同士のかわりはもちろん、「場」や「場」を作っている保育者たち、雰囲気との出会いを通してさまざまに感じ取っていることがわかりました。

園児たちは、感じ取ったことをつぶやいたり、直接保育者に伝えたりしています。感じたことが受けとめられたことで、かわりは確かな経験にたつていったように感じます。「そばにいる」意味がここにあるように思います。

(宮里)



▲ナーサリーと幼稚園をつなぐ階段

保育における「ご近所」関係

ナーサリーと附属幼稚園の「そば」で育つ関係は、「いつも一緒」でも、「ひとときの交流」でもありません。直接かわからない時間も、相手が「そばに」いるという安心感があり、どこかで出会えば、相手を気遣い、気持ちよく過ごし、助け合う。この関係性は、「地域」が実体として存在していた時代の大人社会（回覧板、井戸端、寄せなどで象徴される）においては、生活者にとって必要不可欠の社会的距離感に支えられていました。子どもたちも当然その中で守られ育てられていたと言えます。

近所に行く誰かが遊んでいるから入れてもらう、そんな子ども社会はほぼ消失しています。小さい子どもが一人で道を歩いていたら「どうしたの、お母さんはいないの？」と言ってくれる「ご近所」も今はほとんどありません（不審者と疑われるからです）。ナーサリーと附属幼稚園の「そば」の関係性は、現代社会のその深刻な問題を思い起こさせます。

(浜口)

そばにいる！って
こと

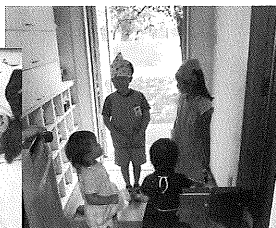
じゃがいもパーティー



▲捕まえた虫をナーサリーの子どもたちに見せている。「すごいね」と言われてうれしくなる



▲じゃがいもを一緒に食べる



▲園児たちによるお誘い



▲上るのを助けようとする幼稚園児



◀自分で上れるけれど助けてもらっているナーサリーの子

土山



▲屋根のてっぺんから跳ぶ園児。それを見つめるナーサリーの子どもたち

▼低い場から跳ぶ2歳児

丸太の家



▲園児たちのヒーローショーが始まった！ 食い入るように見るナーサリーの子どもたち